

地方支部活動の必要性 (東北・北海道支部支部長に就任して)



低温工学・超電導学会 東北・北海道支部支部長
岩手大学

藤代 博之

2018年度(平成30年度)から東北・北海道支部の7代目支部長を務めております岩手大学の藤代博之です。支部長として支部運営を行うと同時に、新任役員として低温工学・超電導学会の運営委員会委員も務めております。今回、支部長に就任して、「サロン」欄への寄稿の依頼がありましたので、日頃感じている支部活動の必要性について述べたいと思います。

東北・北海道支部(通称:北支部と言います)は1996年(平成8年)に関西支部に次ぐ二番目の地方支部として、初代支部長の能登宏七先生(岩手大学)を中心に設立され、今年(2019年)で23年目になります。発足当時から支部会員の親睦・交流を目的に、総会・講演会(又は見学会)、支部研究会、若手セミナー、市民講演会を継続して実施しています。特に、超伝導・低温を志す学生・大学院生の学びの場(若手セミナー)の提供と、行事を通じた教員間の交流が重要です。支部研究会は材料研究会との共催で、東北各地の夏祭りにあわせて開催し、支部以外の会員も参加してこれまで実施してきました。支部発足当時、私は40歳前後で春秋の学会で全国的に発表し情報を得ることが重要で、支部活動の意義をあまり理解できませんでした。しかし、様々な支部行事に参加し、企画や役員を経験し、10周年、20周年の区切りを経過して、支部活動の必要性を改めて認識しています。

北支部は日本における低温・超伝導発祥の地である仙台(東北大学金属材料研究所)のお膝元で、支部発足当時

は東北大学、山形大学、秋田大学、岩手大学、北海道大学など蒼々たる先生方を含め100人弱の会員でした。2002年頃に会員数は120名程度になりましたが、日本の人口減少や生産労働人口減少スピードよりも速く会員数は減少し、現在は70名程度です。その状況の中でも発足当初の理念を受け継いで活動を行っていますが、運営費の多くは維持会員(現在の事業会員)の企業や個人の皆様からの会費で成り立っています。この地域には企業自体が少なく、支部会員の関係する企業等の理解と協力なくしては運営できない状況です。

時々、「もし北支部がなかったらどうなっていたか?」と考えることがあります。年2回の学会だけでは自分の専門分野の狭い交流しか生まれず、たとえ同じ県でも言葉を交わすことがなかったでしょう。学生教育も研究室単位でしか出来ず、他の同様な環境の大学の状況を聞く機会も少なかったでしょう。また、世代や分野を超えた先生方との多くの機会での意見交換や交流は、全国学会では得ることは出来なかったと感じます。その意味で、発足当時の先生方の地方支部の必要性への想いは先見性を感じると同時に、これが出来たのは1990年代の日本全体が今よりも元気であった時代だったからではないかと思います。

低温工学・超電導学会の会員数は1999年の1,341名から2019年現在の970名へと減少しており、この支部活動を継続し発展させることが、低温工学・超伝導分野の発展を下支えすると確信しています。支部会員が減少する中、特に必要なのは学生の組織的な教育だと最近感じます。支部内が連携して超伝導・低温工学の若手セミナーを充実させる方向で、昨年度からは、最近は毎年1泊2日で開催していた若手セミナーを隔年で2泊3日に変更して内容を充実させ、学生は学部・大学院の間に一度は参加してじっくり勉強して貰う方向に変更しました。開催場所も多くの学生が集まりやすい仙台に固定でも良いでしょう。あるいは支部が連携して開催するのも良いでしょう。地方支部に所属する若い世代は、かつて私が感じたように支部活動の必要性を直ぐには実感できないと思いますが、地道な支部活動が最終的には自分の研究や教育に還元されることは確実です。北支部創立から23年の蓄積を今後も継続、発展させたいと考えています。今後とも低温工学・超電導学会の会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。